

2022. 1. 2 (日) マタイ 2 : 16 ~ 18

**2:16** ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。

**2:17** そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。

**2:18** 「ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」

<説教>

マタイは、イエスが人となってこの世に来られたことで私たち人間にもたらされる喜びや平和（羊飼いたちや東方の博士たちが受けたような）だけでなく、嘆き悲しみ悲惨についても記しています。

その嘆き悲しみ悲惨の原因はもちろんイエスご自身ではなく、私たち人間（の罪と悪）にあります。

〈ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させ〉るという残忍なことをしたのは他ならぬヘロデ王でした。（16）

「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って東方の博士たちをベツレヘムに送り出した（2:8）後、いつまで経っても博士たちがヘロデのところに戻ってこなかったことから、〈博士たちに欺かれたことが分かった〉ヘロデは〈激しく怒〉りました。

〈そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させ〉ました。

ユダヤ人の王として生まれた幼子が誰で、どの家にいるどの幼子かを特定できない以上、〈ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させ〉るのが確実な方法でした。

自分の王位を脅かす危険人物だと自分が疑いをかけた者は、それが自分の妻であれ、しゅうとめであれ、子どもであれ、次々と殺したのがヘロデでしたから、赤の他人の子どもたちを〈みな殺させる〉ことなど何でもなかったでしょう。

ベツレヘムとその周辺一帯の幼児殺害事件は、自分の地位・立場・権威や権利を守るためなら手段を選ばない、自己中心の塊の人間ヘロデが起こした、ヘロデの罪一心の中の密かな企みに始まり、実際に行動として実行する全ての過程におけるところの一でした。

また、いくら恐ろしいヘロデの命令とは言え、ヘロデに〈遣わ〉され、ヘロデの命令に従った〈人〉の罪でもありました。

そのようにしてベツレヘムの幼児虐殺の罪と悪が行われ、全く理不尽に幼い子を殺された母親たちまた家族親族たちの泣き嘆き叫ぶ声が響き渡ったのです。

〈そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。〉とマタイは言います。（17-18）

〈ラマ〉とは、〈ラケル〉が葬られたと伝統的に言われていた所で、かつての南王国ユダの地（の中でベニヤミン族に割り当てられた地）にあります。

〈ラケル〉はヤコブの妻で、イスラエル12部族の父祖となったベニヤミンの母、また

エフライムとマナセの祖母となります。

預言者エレミヤの時代から100年ほど昔、イスラエルの12部族のうちの10部族からなる北イスラエル王国（エフライムとも言われた）が、神への背信・反逆の罪の故にアッシリヤによって滅ぼされ、多くの人が殺されたりアッシリヤに捕らえ移されました。

そのことをラケルが墓の中で嘆き悲しんでいる、それは慰められることを拒むほどの悲しみだったエレミヤは言いました。

またベニヤミンのことを考えるなら、エレミヤの時代、ベニヤミン族が属する南ユダ王国も同じく神に対する背信と反逆の罪の故に、バビロンによって滅ぼされ、多くの人が殺されたりバビロンに捕らえ移されるということが起ころうとしており、やがてそれがは起きました。

北王国にしる、南王国にしる、イスラエルの民に起こった、その慰めを拒むほどの嘆き悲しむべき悲惨の原因は、神に反抗し、神を拒み、神に背き、神に立ち返ろう（つまり悔い改めよう）としなかった人間、イスラエルの民の罪にありました。

あのときのラケルがしたのと同じ〈むせび泣きと嘆き〉をもたらす悲惨が、今度は、神に反抗し、神がこの世にお遣わしになった御子イエスを拒み、殺そうとし、神に立ち返ろうとしなかった人間ヘロデによって起こされました。

そしてそれは同時に、そんなヘロデの顔色を伺ってヘロデに追従していたイスラエルの民や民の祭司長たち律法学者たちの民の罪の故でもありました。

しかし、そんな私たち人間の罪ゆえの〈むせび泣きと嘆き〉の悲惨（この地上のものだけでなく、なかんずく地獄の永遠の刑罰の悲惨）から人間を救うために、父なる神は御子イエスをこの世に人としてお遣わしになったのです。

ヘロデは〈人を遣わし〉、遣わされた〈人〉（おそらくヘロデの部下の兵士たちでしょう）はヘロデの命令に従い、ヘロデの罪と悪の意思を行いました。

しかし天の父なる神は、そんなヘロデが（その他多くのヘロデのような支配者が）支配するような人間の罪の世に御子イエスを人としてお遣わしになりました。

幼子イエスがエジプトに逃れ、ヘロデの手にかかって殺されることがなかったのは、やがて十字架で死なれるためでした。

ヘロデの殺害計画を免れた幼子イエスは生涯御父のご命令、御意思に全くお従いになり、私たちの罪のための〈十字架の死にまで従われました〉（ピリピ2:8）。

ヘロデが〈博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った〉とある「欺く」と訳された言葉は、「嘲る、からかう」とも訳される言葉で、新約聖書中（マタイ、マルコ、ルカの中だけで）13回使われていますが、そのうち11回は、イエスが「嘲られ、からかわれる、または人々がイエスを「嘲り、からかう」という、全て十字架に関係する場面で使われています。

〈欺かれた〉、つまり〈嘲られた、からかわれた〉ときに〈激しく怒つ〉て幼子イエスを殺そうと〈ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させ〉、そうやって他人の命を犠牲にして、自分の地位・権力を身を守ろうとしたのがヘロデでした。

一方イエスは嘲られてもからかわれても、〈辱めをものともせず十字架を忍び〉（ヘブル12:2）、他人を殺すのではなく、ご自分が私たちの罪のために十字架で死なれました。

イエスは十字架に架けられる前も、架けられてからも、祭司長・律法学者たち、ユダヤ

人たち、ローマの兵士たちから嘲られ、からかわれながらもそれらを甘んじてお受けになり、耐え忍ばれ、十字架から降りることなく、十字架の死に至るまで御父への従順を全うされ、神に完全に受け入れられる義を全うされました。

そして三日目に死人の中からよみがえられて、罪と死に打ち勝って〈神の御座の右に着座され〉(同) たのです。

神はそのイエスを信じる私たちの全ての罪を赦し、イエスの義を私たちに与えてくださり、私たちを義人と見なしてくださり、神の子として受け入れてくださいます。

それゆえ「あなたの将来には望みがある」(エレミヤ 31:17)と神は言われるのです。